

開かれた学校づくり全国交流集会 参加者の感想

11月23日（土）、川崎で行われた「開かれた学校づくり第23回全国交流集会」、翌日は大東学園高校（東京）の公開研究会（三者協議会）を傍聴させて頂きました（全国交流集会は2000年に始まり、コロナ禍で開催されなかった年もありますがほぼ毎年開催。個人的には2002年以降、現地開催では久々の6回目参加。23日朝、新幹線のトラブルがありましたが、開始時刻には間に合いました）。

今回はテーマとして『学校や地域において子どもの意見表明の機会をどのように保障していくかー子ども基本法・こども大綱を活かした学校づくり』、川崎はじめ神奈川県下の実践報告を中心に交流し、3つの視点（①学校は「意見表明の機会の確保・子どもの意見の尊重」にどう取り組んでいるのか。②学校、地域は声を上げにくい子どもの意見を、どう聴き、応答、支援しているか。③自治体は、子ども施策に、子どもと保護者の意見を反映させるためにどうしているか）から子どもが意見表明しやすい学校づくりと地域づくりについて学び合うことがあげられています。

「川崎市子どもの権利に関する条例」は2001年4月に施行されています。午前の部では、川崎含め神奈川県下でこれまでの様々な取組（行政関係者、居場所運営ルポライター、学校教職員、私学高校生ら）が報告されました。高校生との質疑もありました。午後は指定討論、on-line含め参加者との質疑討論、最後は会の共同代表、宮下与兵衛さんからまとめの挨拶で終了しました。子どもの権利条約批准から30年、現在の到達点と課題の確認とも言えそうです（子ども家庭庁発足、子ども基本法、子ども大綱、生徒指導提要进行をめぐって今後の課題もあります）。今回も中身の濃い催しとなりました。

2日目は、世田谷区、大東学園高校にて公開研究会（三者協議会）を傍聴参加させて頂きました。2006年に同校で行われたこの全国交流会に参加させて頂き大きな刺激を受けましたが、今回も新たな刺激を受けることとなりました。ユニークな風貌の副校長による基調報告「生徒の手による学校空間づくりをめざして」（“いつかは、三者でこの「学園生活の規定」が全面的に改訂されることを願う”“将来は「学園生活の規定」そのものが最小限になるような学校をめざして”）で始まり、三者協議会では三者の間で熱い議論が行われました。このような体験を通して成長していく若者、保護者、教師の姿を見ると自分たちの今後の実践へ向け大きな励みとなります。

出番と居場所、自己肯定感、関係性を如何に構築するか、対話を通し、個人の要求を集団の要求へ、参加と権利と責任、ささやかでも手応えのある体験ー身の回りでも、多忙やICT関連で振り回される状況の中、意識するしない（させられなくなっている？）にかかわらず、スタンダードに頼る（取り決め、ルール、枠がないと出来ない？）、自己責任に期す動きを様々な場面で感じるようになっていく思いの日々ですが、関係者・当事者の合意形成のもと（最低限の共有認識にとどめれば良いのだが、、）、ヒトは、人間はどんなときに動くのか。当事者として、参加と共同の実践が切に求められていると思います。授業づくりー学校づくりー地域づくりーこれらは繋がっています。グローバルな視点から参加と共同のもと、日々の実践、教文活動にあたりたいと感じる貴重な2日間でした。

（その他、県内参加メンバー間での議論&交流、会場に置いてある自治体関係資料は日々の実践に繋がっていきます。タクシーも利用しましたが、情報社会の中で都内タクシー事情も新たな局面を迎えているようです。参加、そこに行くから得ることが出来る研修・研究の機会が常に重要と思います。開かれた学校づくり全国連絡会への参加も呼びかけたいと思います。

（岩村田高校 寺尾真純）

川崎市の自治体主導の「子ども会議」の取り組みは、教育委員会所管となると、果たして本当の自由な意見表明の機会となるか疑問に感じました。市長との懇談会も開催されたようですが、参加児童・生徒に事前の指導が入り、発言がコントロールされるのではないかと感じてしまいました。

旭丘高校の全学協議会の取り組みの報告では、高校生3人の堂々とした発表が聞けて頼もしく思いました。自分の意見を言える機会を持ち、人前で意見を言えるようになり、活動を通して成長をしたことが伝わってきました。

大東学園高校の三者協議会では、協議、懇談の場で生徒が自由に発言している姿が印象的でした。要求をする生徒側が事前の準備も重ねてきている様子もうかがえました。社会が変われば、学校も変わっていくものです。変えていくことにはエネルギーがいりますが、安易に手に入れたもの、安易に変わったものには価値がないと思います。来年は身だしなみ規定の協議になりそうですが、どう展開していくかが興味深いです。

（長野東高校 牧内淳一）

今回、以前からぜひ、見てみたいと思っていた東京の大東学園高校の三者協議会を参観する機会をいただいた。期待にたがわず、大変エキサイティングで刺激的なドラマに遭遇できた思いがしている。

その日は、まず「授業中に水分をとらせて欲しい」という生徒側からの要求に対して討議していた。生徒会では全校生徒にアンケートを実施し、授業の妨げにならない形での要求の実現をはかるよう、何ヶ月も掛けてクラス討議や執行部での話し合いを重ね、綿密に資料を用意したものを示す。いきなり議決ではなく、それぞれの立場から、なぜ、その校則が今まで必要だったかを含めて三者が意見を出し合う。そんな手順を踏んで協議した結果、生徒側からの提案は承認された。

職員会議で決めればすぐに決まることをまさに、大変な手間と労力をかけて、教育的意義を感じて20年も続けている、教職員のその情熱に感銘を受けた。そして大きな成長をとげている生徒達、そして保護者も学校づくりの一員として発言している。

次に、校則の髪の毛の染色や身だしなみに関する校則への問題提起が生徒側からあった。生徒達の鋭い指摘、親の思い、実は、教員側もルールを守らせることに縛られていることに対する不自由さなどが率直に語られ、自由闊達に意見が飛び交っていた。そして、どんな意見であっても耳を傾け、賛同したら拍手しあう。多分、この日で議決ということではないのだろうし、今後どうやって進めていくのか気になったが、帰りの電車の時間が迫っており、大変残念であったが最後まで参観せずに退席させてもらった。

最後に副校長さんの挨拶文の次のような一節を紹介したい。

「一見アナログなこの取り組みですが、AIやICTが高度に発達したこの時代に、対面して、ことばによる意思疎通で、『折り合い』をつけることは人間同士にしかできない、むしろ価値あること」「教育

が『決まった所作を繰り返し、表面をきれいに整えること』に終始し、数値化とカテゴライズによる評価軸ばかりに偏ると、『学校（人間）が学校（人間）じゃなくなる』と捉え、今一度、学校を『何かを与えられる場所』ではなく、『自分からつくりに行く場所』としての潮流に押し上げていく必要を感じています」

（箕輪進修高校 中村富貴子）

先日、大東学園高校の三者協議会(以下：協議会とする)を見学させて頂いた。当日の午前中は、昨年協議会で決まった体育館の冷暖房の設置について、また、コロナの影響で中止になっていた昼食事業の復活について生徒会から詳しい説明があった。その後、これまでの学園の協議会についての経緯を含めた学校の状況の説明が教職員からありました。大東学園では、2003年より協議会が始まり今年で22年になるという長年に渡り継続している。これについては、生徒の発表ぶりからも生徒達が協議会を通して主体的に学校運営に関与している状況を垣間見ることが出来たような気がした。協議会は、午後から始まった。今回の協議会の主な協議事項は、教員に許可を取らなくても水分補給を可能にしてほしいというものであった。10月に全校で試験的に一定のルールを決め授業中に水分補給を行ったという経緯があり特に大きな問題がなかったようで比較的スムーズにこの生徒からの要求は、承認されることとなった。これまでのところでは、ある意味で形式的に進められた感じがあったが、注目すべきところは協議会の後半の部分で「身だしなみ」についての討議の時間であった。学園では、非常に細か校則が定められており、その校則を変えて欲しいという生徒の意見に対して学校全体の事を考え慎重な意見をする教職員の意見、また、さまざまな角度から出された保護者の意見など活発に議論が繰り広げられた。生徒・教職員・保護者が、対等の立場で意見が交わされていた。協議会では、生徒たちにとって学校運営について自分たちの意見を表明できる場でありそして学校を変えていく場である。このことは、生徒たちにとって主権者を育てる学びの場であると感じさせられた。

（松本筑摩高校 石川伸次）